

道 どうひょう 標

d o h y o

年間特集 「おてら」

第二回・あるお寺の情景 正木 高志さん

連載

あなたのいのちの物語 自由を体現することの悲劇性
伝承を科学する 寺院が舞台となっている能
道しるべ スタートを示す言葉

2021 春季号





年間特集

第二回

正木 高志

「おてら」

「あるお寺の情景」

昔しばらく滞在したお寺でのこと

コルカタがまだカルカッタとよばれていた頃のこと…

大都市の中心に近い住宅地の一角。夕暮れ時。インドのスケールではさほど大きくない寺院。境内の池の畔にゴザが敷かれ、百人あまりの老若男女が座っています。正面の椅子には、黄土色の衣をまとった高齢の僧が座り、ヤシやマンゴーの樹々が人

びとの上にやさしい陰を投げかけている。

ひとりの若い女性が涙声でなにか訴えている。子供が病気にかかったのだらうか、夫が仕事を失って生活に困っているのだらうか。老僧はまるで母親のようになんかやさしくうなずきながら、悩みに耳を傾けている。

こんどは毎日やってくる常連のようで、老僧の間に席を占めた老人が、経典を引用しながら、

なにやら難しい哲学論議をしかけたようだ。僧はいなすように軽妙に答え、老人はなおも食い下がって反論する。僧が瞑目する。人びとは答えを待つ。一瞬の間。それから僧がやりと笑って何か言う。と、人びとの間に大爆笑が湧き起こる。僧もお腹を抱えて笑っている。どうやら僧の勝ちらしい。

外のラッシュアワーの喧噪がうそのようだ。騒音が届かないというのではない。車の警笛や物売りの声は響いてくるのだけれど、それとは別の、精神の静寂と平安が寺院の境内をおおっている。浄らかで、明るく、温かく、やさしい雰囲気がある。ここには満ちている。

一日の仕事を終えた男女が入ってきては、つぎつぎに後ろの席を埋めてゆく。疲れやストレスを帯びてきた人たちが、たちまちの内に、活き活きとした喜ばしい表情を取り戻してゆく。

別の人が、ある聖者の話をして

外の喧噪がうそのよう。

静寂と平安が寺院の境内をおおっている。

くれるようせがんだようだ。しばらく閉じた目を開けて老僧が語りはじめると、とたんに厳肅なムードがただよい、人びとは真剣に聴き入る。目に涙を浮かべるものもいる。なんとという静けさだろう。池の魚がパシャンと跳ねる。花壇の花に微風がそよぎ、甘い香りがながれる。陽はさらに傾き、樹上の小鳥たちが騒がしく寝支度をはじめ。お香の香りがただよい、本堂から夕拝をつけるベルが鳴る。人びとは深く老僧におじぎをし、あるものは家路をたどり、あるものは夕拝に参加するため本堂に入ってゆく。神への賛歌が流れ、夕闇にとけてゆく。

ある朝、食堂へ行くと、なんと焼きたてのマサラドサがお皿にのっていました。マサラドサは南インドの人が朝食によく食べる料理で、豆とポテトのドライカレー。お好み焼きのような、B級グルメの定番です。思わずワイイと喜ぶ

と、老僧がニコニコ笑いながら、「君が大好きだと言っただろう。思う存分食べなさい」とおっしゃいました。屋台のマサラドサ屋さんが呼ばれて、境内でどんどん焼いています。お寺のみんなも喜んでたくさん食べています。ふだんは一枚か二枚で満足するマサラドサを、その朝は六枚も食べてしまいました。



こんなお寺が近くにあったら

『道標』の原稿依頼を受け、「お寺の在り方」特集であることを聞いて、私の任ではないと思ったのですが、昔しばらく滞在したあるお寺のことを思い出し、書かせて頂くことにしました。一見、無秩序でカオス的に見えるカルカッタの一隅に、こんな美しい靈性の花が咲いていたのでした。靈性の「れ」の字も知らずに旅をしていた若者にとって、そこで見たお寺の情景は、初めて知った靈性の衝撃的な洗礼であり、まるで昨日のことのように思い出されます。

今日の日本では、一日の仕事に疲れた人は、居酒屋で一杯飲んで、カラオケでストレスを発散するしかありません。でもそれは逆に、さらなる負荷を心身にもたらします。明るく、浄らかで、精妙な意識にふれたとき、

明るく、浄らかで、精妙な意識にふれたとき、

心からのやすらぎと喜びを得る。

私たちは心からのやすらぎと喜びを得ます。もしもそんなお寺が近くにあったらどんなにいいでしょう。子供や若者たちにとっても、すばらしい教育となり、遊び場にもなるでしょう・・・
ここまで書いてきたところで、こんなことも思い出しました。

夜になると夕食後に、見習い僧たちが老師の部屋に集まって、質疑応答の時間がありました。あるとき話の流れの中で、「愚鈍な私ですが、亀のように確実に、ゆっくりと、ヒマラヤを目指してゆきたいと思います」と言ったとき、昼間の母親のような優しさとは打って変わった厳しさで、「そうではない！」と一喝されました。「驚のように、一気に飛翔するのだ！」。そのときの老僧の、ヒマラヤの峰のような峻厳な眼差しが、今も眼裏に焼き付いています。

正木 高志(まさき・たかし)

1945年生まれ。1960年代の半ばからインドを遍歴して、靈性・哲学を学ぶ。80年に帰農。自給自足の生活をめざす。農業のかたわら執筆や講演を続ける。2000年から植林をはじめ、国内外で植林をする。森林ボランティア「森の声」主宰。また憲法九条をまもるための平和の巡礼「ウオーク・ナイン」を行う。

著書に、「木を植えましょう」「出アメリカ記」「空とぶブッダ」「蝶文明」「地球のマユの子供たち」など。作詞作曲したCD「もりのこえ」をリリース。



Your Spiritual Stories
あなたの物語
いのちの物語

14話目

「自由を体現する」

ここの悲劇性」

『夜間飛行』

アントワニス・ド・サンリテグジュペリ

サンリテグジュペリは一九〇〇年生まれで四四年に亡くなっている。かつて郵便機のパイロットだった作家は、フランス空軍の少佐としてコルシカ島から飛び立ち行方不明となり、数十年後に地中海で遺品が見出された。多くの人々に感動を与え続けている『星の王子さま』は、その直前の四三年に刊行されている。

『夜間飛行』は一九三一年の刊行だ。南半球最果てのマゼラン海峡からブエノスアイレスへ、二五〇〇キロの航路で郵便物を運ぶ航空機が雷雨にあつて遭難し、消息を絶つ。その短い数時間の出来事が物語られる。二枚の翼がある小さな二人乗り飛行機だが、航空郵便に需要が大きかったことは十分に想像できる。この訳書には当時のその写真が掲載されている。悪天候などで遭

難が予想される。夜間飛行はとくに危険だが、配達のをねらつてあえてそれに挑んだ。

操縦士に惹かれる若者がおり、リスクを承知で新事業に挑む運営責任者がいる。作家自身、その両方の役割を務め、同僚の墜落水死を経験している。若者がいのちを落とすリスクを冒して夜間飛行を行う必要があつたのか。若者にとっては、そこにこの世を超える自由への憧憬が潜んでいるのかもしれない。だが、愛とともにある穏やかな日常にこそ価値があるのではないか。

作家はそのような揺れのなかに生きる人々を描き出していく。



パタゴニア上空を飛ぶ夜間飛行の操縦士、ファビアンは「飛行」の魅惑に酔うが、中継地に着陸しようとする疲労感に襲われる。

「人びとが暮らす家、いきつけのカフェ、いつもの散歩道の木立ち、彼は、征服した宵闇のなかに立つ覇者に似ていた。自らの帝国の領土に思いをよせ、そこに人びとのおさやかな幸福を見出す征服者である」。(一一ページ)

だがこの物語の主人公は、やがていのちを失う操縦士ではなく、ブエノスアイレスに居て全路線に責任を負うリヴィエールだ。彼はすべてを厳格に取り仕切り、どんなミスをも見逃さない。それによつて「郵便輸送への崇拜がすべてに優るものになっていた」。彼は時おりこう言った。「この男たちは幸福だ、自分の仕事を愛しているからだ。なぜ愛しているかといえば、わたしが厳格だからだ」(三四ページ)。

ブエノスアイレスの深夜のオフィスの場面だ。広範囲の雷雨に見舞われたファビアンと通信士の生存の望みはほぼなくなった。

新婚六週間の妻が安否を気遣つて来ている。「待つしかない」とリヴィエールは言う。「彼女は弱々しく肩をすくめた」。「いま家で、またあのランプや、したくのできた食事や、飾つたお花を眺めていたつて……」。遭難事故はリヴィエールにとつて決定的な敗北とも言える。だが、彼はくじけない。

「リヴィエールを襲つた敗北は、おそらく来るべき真の勝利に結びついていくための約束なのだ」。(一二三ページ)

厳しい規律に服し未踏のものに挑む。現代の実業家や研究者のようでもあるが、リヴィエールは自由の魅惑の危うさと挑む人間の悲劇性に十分自覚的だ。だからこそ作家は「真の勝利」の体現者とよぶのだろう。

島蘭進(しまざの すむむ)

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『神聖天皇のゆくえ』(2019年5月)、『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』(2019年5月、春秋社)、『ともに悲嘆を生きる』(2019年4月、朝日新聞出版)、『いのちをつくつて』(2016年、NHK出版)、『宗教を物語でほぐく』(2016年、NHK出版)がある。

伝承を

科学

する

寺院が舞台となっている能

二百近くある能の作品の中には、寺院が物語の舞台となる作品がいくつもある。清水寺、四天王寺、善光寺、清涼寺、仁和寺などの大寺院の他に、在原寺、安楽寺、土師寺など、廃寺となった寺が舞台となる作品もある。もちろん高野山や比叡山も、能の舞台となっている。神仏習合の伝統をふまえて、天満宮や八幡宮も寺院の数に入れるなら、作品の数は二十をゆうに超える。寺院という舞台で繰り広げられる様々な物語を、以下に整理してみたい。

寺院はしばしば、親子の再会がテーマとなる能の舞台にえられる。滋賀の三井寺は〈三井寺〉の、長野の善光寺は〈柏崎〉の舞台である。大阪の四天王寺は



《道成寺》(シテ：浦田保親)

(c) yasuchika Urata

女白拍子が女人禁制の結果をこえるべく寺男に話しかける場面

〈弱法師〉の舞台となる。施行で賑わう中で、父子の再会がはたされる。嵯峨の清涼寺は〈百万〉の舞台である。大念仏の法要の場で、主役の女芸人(曲舞舞)は法楽の舞を舞い「これ程多き人の中に、などや我が子のなきやらん、あら我が子恋しや」と歌う。多くの人が集まる場所だからこそ、寺院は再会の舞台になる。

つぎに寺院は、本尊と深い縁のある人物の幽霊が出現する場である。〈田村〉では、京都の清水寺に立ち寄った僧侶の前に、ひとりの童子が現れる。童子はじつは、坂上田村麻呂の幽霊であり、征夷大将軍として東夷を平定できたのは、清水寺の観音菩薩の靈験による、と物語る。〈誓願寺〉では、京都の誓願寺にたどり着いた僧侶の前に、歌舞の菩薩となった和泉式部の幽霊があらわれ、西方浄土を讃える。誓願寺は和泉式部の墓所でもある。〈当麻〉では、奈良の当麻寺に着いた僧侶の前に、中将姫の幽霊が現れ、浄土の莊嚴の

絢爛さを描写する。中将姫は、蓮の糸で曼荼羅を織り、浄土経を誦し、極楽への往生をはたした当麻寺ゆかりの女性である。〈経正〉は、仁和寺が舞台である。琵琶の名手であった平家の若武者、平経正のために、音楽法要がとりおこなわれる。管絃の合奏に引かれて、平経正の幽霊が出現し、琵琶をかきながら姿を見せる。

寺院には、女人禁制の空間があった。先述の〈三井寺〉〈柏崎〉はその境界を破ることで母子の再会へと、物語がすすむ。忘れてはならないのは〈道成寺〉である。白拍子の女が、鐘の供養のためと、女人禁制をやぶり、鐘の下で舞を舞う。そのまま、鐘の中に入り、執心の炎で鐘を落としてしまう。歌舞伎でも著名な作品である。ところで寺院には、本尊があるが、観音様や阿弥陀様などの本尊が能の主役として登場することはない。そんなこと当たり前だと思われるかもしれないが、神社と対比してみると、謎が生まれる。

神社もしばしば能の舞台となるが、その場合、神社に祀られる神体そのものが、能の主役として出現するのである。たとえば淡路島の二之宮に、伊弉諾尊が出現する(淡路)。賀茂社に別雷の神が(賀茂)、男山八幡には高良明神が(弓八幡)、主役として出現し、名乗り、舞を舞う。能における仏と神の扱われ方の違いには、日本文化を考えるヒントが何か隠されているにちがいない。

藤田隆則(ふじた・たかのり)

1961年山口県生まれ。大阪大学卒業。博士(文学)。京都大学助手、大阪国際大学助教授、ミシガン大学招聘教授をへて、現在、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。専攻は、民族音楽学。主な研究対象は、日本の能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能の多人数合唱』『能の地拍子研究文献目録』『日本の伝統音楽を伝える価値―教育現場と日本音楽』『能のノリと地拍子―リズムの民族音楽学』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えていくための応用的研究に従事。

スタートを示す言葉

平成二十八年 十一月、西本願寺秋の法要にて大谷光淳門主は「私たちのちかい」と題されて以下の言葉を発せられた。

一、自分の殻に閉じこもることなく

穏やかな顔と優しい言葉を大切にします
微笑み語りかける仏さまのように

一、むさぼり、いかり、おろかさに流されず

しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように

一、自分だけを大事にすることなく

人と喜びや悲しみを分かち合います
慈悲に満ちみちた仏さまのように

一、生かされていることに気づき

日々、精一杯つとめます
人びとの救いに尽くす仏さまのように

発表より時間が経っているが感じたことを記してみる。

まず、仏教用語が少ない。「仏」と「慈悲」だけである。「阿弥陀仏」「本願」

「浄土」「往生」「信心」「念仏」「他力」「凡夫」など、真宗用語は皆無である。意図的とも感じられる。

ただ、浄土真宗は伝統仏教の中では布教伝道に力を注ぎ、門信徒に聴聞をすすめてきた。その伝統は今も伝えられている。

しかし実際に聴聞されている人びとに「ホトケさまとはどのようなことですか」と尋ねても、ハッキリとした答えは返ってこない。答えがないのは内容が伝わっていない証であろう。

伝道に力を注いできた真宗での現状である。他宗はどうだろうか。仏教全体で「ホトケ」を自身の目標と受けとめる伝道になっているだろうか。言葉に馴染みがあっても、内容がわからねば、拝んでいても格好だけのことである。

「私たちのちかい」はかかる状況下に仏教徒の目指すべき生き方と、実現すべき目標を示すものと感じられる。だから真宗者のみならず、広く「私たち」一人ひとりに改めてスタートを示す言葉ではと感じている。

編集後記

今年も新型コロナウイルスの猛威は続く。このウイルスは文明社会を謳歌する我々の今までの日常、常識、価値観、生活というものを容赦なくなぎ倒していく。それもわけのわからないうちに。悪戦苦闘！まさにウイルスとの戦いは、我々の文明にとって人間同士の『テロとの戦い』よりも脅威かもしれない。歴史的に見ると寺院の役割も平和時と非常時とは自ずから違ってくるという。応仁の乱の後、蓮如上人が出られたように。

「おてら」特集二回目、正木さんがインドで見られた情景、それはお寺の在り方ともかく我々日本人にこころの在り方を示唆していただいた気がするのである。 合掌

◆◆お知らせ◆◆

この度、当会では耳で聞く聖典、Audio 現代語版仏説阿弥陀経、歎異抄（原文、口語訳各一十巻）を制作いたしました。シンセサイザーの調べに乗り女性朗読者が優しく仏の世界を語りかけます。ご興味のある方は事務局まで
TEL 06-6531-1132/28
メール ktad@gmail.com

表紙の絵

花の命

新型コロナウイルス増大で今年も始まった。何をしてもいつかは人は死に至ることを自覚して、気をつけて生きるしかない。疫病もそのうちに収束するだろう。今年は昨夏暑かった分寒い昨今だ。年が明けると梅や椿が開いて美しさを誇示している。京都御所の西北側の旧近衛家跡に沢山の枝垂れ桜があるが苑庭池跡にのびる桜が一番華やかである。紅葉と違い花の盛りは短い。絢爛と咲く花の命は短い。「花の命は短くて苦しみことのみ多かりき」 (林芙美子)

畠中光亨 (はたなか こうきょう)

日本画家 / インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
ホームページ <http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)